

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22520019

研究課題名（和文）

ガレノスによる古代ギリシア認識論・自然学・倫理学への反省的総括の研究

研究課題名（英文） Studies on Galen's Reflective Summarization on Ancient Greek Epistemology, Physics and Ethics

研究代表者

金山 弥平 (KANAYAMA YASUHIRA)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：00192542

研究成果の概要（和文）：ガレノスの認識論、自然学、倫理学に焦点を合わせ、古典期・ヘレニズム期にわたる古代ギリシア哲学の歴史を見直そうとする本研究では、関連するガレノス著作の翻訳を進めるとともに、ガレノスとその著作のうちで総括的あるいは批判的に扱っている諸思想を、プラトン、アリストテレス、ヘレニズム哲学、また彼と同時代の諸思想のうちに探り、そこから現代とは異なる古代思想の諸特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study, which focuses on Galen's epistemology, physics and ethics in order to take a new look at the history of Greek philosophy ranging from the Classical through the Hellenistic and into his own period, engaged in the translation of Galen's relevant works, and examined the kind of ideas from Plato, Aristotle, Hellenistic philosophy and his contemporary thought that Galen tackled in a summarizing or critical manner, so as to find the characteristic features of ancient approach different from modern thought.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2011年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2012年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 総計 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：ガレノス、プラトン、アリストテレス、西洋哲学、西洋医学、自然学、理性、感情

1. 研究開始当初の背景

ガレノスは、医学者・生理学者として偉大な業績を挙げただけでなく、認識論・言語哲学・自然学・倫理学にまで及ぶ哲学の幅広い領域で執筆し、著作の多さ・包括性・総合性

において並外れた巨人的な学者である。哲学関係の著作はほとんど残っていないため、医学者としての面が強調されがちであるが、しかし著作題名『最良の医師はまた哲学者でもあること』が示唆するように、彼は優れた哲

学者でもあった。すなわち、ローマにおいて医者・医学者として活躍するかたわら、プラトン・アリストテレスの古典期哲学とヘレニズム期哲学を総括的に振り返り、深い理解に基づいて諸理論を比較し、各立場の長所・短所を見極め、哲学のほぼ全域にわたる総合を行なったのである。この歴史的な位置づけゆえに、17世紀のデカルト、ガリレオ、医学者ハーヴェイ等にとって、ガレノスは、対決を通して自らの立場を打ち立てるべき大きな壁ともなった。それゆえ、過去の哲学に対するガレノスの反省的総括を軸として、彼以前の哲学、および彼と同時代の哲学を見直すことは、研究者にとって、ガレノスの幅広いパースペクティブを得て、そこから古典期・ヘレニズム期にわたる古代ギリシア哲学の歴史を見直す絶好の機会となる。とくに、古典期およびヘレニズム期哲学という哲学の大きな潮流、および各潮流の中で展開された種々の哲学的・科学的立場に対して彼が行なった批判的検討は、プラトン・アリストテレスなどの古典期の哲学の位置づけ、また個々の思想についても、新たな視点と研究のヒントを与えてくれる、という期待のもとに、本研究をスタートさせた。

研究代表者にとってガレノスへの関心は、1983年のケンブリッジ大学留学時に遡るものであった。最初の指導教員 G. E. R. ロイド教授は、古代医学の大家であり、ロイド教授との出会いを通してガレノスへの興味を呼び起こされるとともに、また次の指導教員 M. F. バーニエット教授の大学院セミナーで、セクストス・エンペイリコスが属していた医学学派（経験派）に関する最重要の資料の一つであるガレノスの『経験派の概要』をテキストとして読む機会を得、研究代表者は、ガレノスへの関心をさらに掻き立てられた。帰国後も、研究代表者は、自ら翻訳した J. アナス、J. バーンズ『懐疑主義の方式』（岩波書店、1990年）で、ガレノスが古代懐疑主義の重要資料として取り上げられていること、またロイド教授の『後期ギリシア科学』（法政大学出版局、2000年）で「ガレノス」の章の翻訳を担当したことにより、さらにガレノスへの関心と理解を深めるとともに、研究分担者とその関心を共有し、両者ともに少しずつ将来のガレノス研究に向けて準備をするにいたった。

それは、研究分担者による翻訳「ガレノス『経験派の概要』」と、研究代表者の「ピュロン主義、経験主義、方法主義—ガレノス『入門者のために諸学派を論ずる』（序論および翻訳と訳注）—」に通じる。その後、研究代表者と分担者は、古代懐疑主義研究の必須資料であるセクストス・エンペイリコス全訳の作業に入った。そしてそれがほぼ完成した時点で、セクストス（200年頃）によるそれま

での思想の総括が内包する豊かな内容を参考にしつつ、彼と同時代に活躍したガレノス（129年—220年代）による同様の総括を振り返り、そこからガレノスが対象としたプラトン、アリストテレス、ヘレニズム哲学、宗教思想などに新たな光をあててみることを計画したのである。その際、古代哲学における哲学の3部分（論理学、自然学、倫理学）にならって、焦点を認識論、自然学、倫理学に据えることにした。

2. 研究の目的

研究の目的は、一つには、京都大学学術出版会の西洋古典叢書の一冊として出版すべく、ガレノスの哲学理論的著作のいくつかを翻訳することにあつた。翻訳の中には、上記『経験派の概要』、『入門者のために諸学派を論ずる』だけでなく、『最良の医師はまた哲学者でもあること』、『混和について』、『われわれの身体最良の構成について』など、彼の哲学観、自然学・生理学理論に関わる翻訳、および彼の哲学的全体像を知る資料『自著について』および『自著の整理分類について』も含まれる予定であった。『混和について』を除けばいずれも量的には小品であるが、彼の哲学的著作の大半が失われた現在、すべて彼の哲学のあり方を知るための非常に貴重な書物である。

これらの著作の翻訳は、ガレノスの他の諸テキストの考察を促し、またそれは、ガレノスが古代哲学を総観的に反省し、そして批判する独自の地点にあることを考慮に入れるとき、彼の目を通して、古代哲学の諸思想を振り返る絶好の機会にもなる。なぜなら、正確な翻訳と注のためには、彼の認識論・自然学・倫理学の立場を、先行哲学者のそれとの比較において正確に捉え、位置づけることが必要であり、そこから個々の問題に関するガレノス、および彼が対決する哲学者、科学者、医学者の特徴的立場、とくに現代の諸思想と異なる立場が浮き彫りになりうるからである。

3. 研究の方法

(1) 第一に、ガレノスの哲学的・科学的著作の翻訳に研究代表者と研究分担者で協力して従事した。その際、これまでのセクストス全訳作業の場合と同様に、研究代表者と研究分担者のあいだで翻訳箇所は行なわず、翻訳、訳注、解説の全体にわたって二人が協同し、テキストの読み方や解釈が異なる場合は相談の上いずれかを採用し、場合によっては別の可能性を注記するという方法を採用した。またどちらかがすでに発表した翻訳も、今回改めて相互チェックしなおし、それによって一層深い理解を目指すことにした。翻訳の対象とした著作は次のとおりである。

る。

- ① 『自著について』、『自著の整理分類について』『最良の医師はまた哲学者でもあること』: 哲学者かつ医者であったガレノスの基本的立場と哲学的全体像を示すもの。
- ② 『入門者のために諸学派を論ずる』、『経験派の概要』、『最良の教えについて』: 哲学・科学・医学にまたがる認識論の問題を論じるもの。
- ③ 『混和について』、『われわれの身体の最良の構成について』: 自然学の物質的原理である4構成要素、医学・生理学の原理である4体液、自然学全般の機械論的原理である混合・混和に関わるもの。

(2) また翻訳作業において、しばしば参照することになるのは、『ヒポクラテスとプラトンの学説』であるが、この著作では、彼と先行哲学者たちの魂論・倫理学が自然学との密接な関係のうちに詳論されている。それゆえ、ガレノスの魂論を含む倫理学にも踏み込んでいくことにした。

(3) さらにガレノスがプラトン、アリストテレス、ヘレニズム哲学等々について反省的に、またある場合には批判的に検討しているところから、彼の総括を見ていくなかで、これらの哲学者の思考についてのヒントをも積極的に探り出し、活用していくことにした。

(4) ガレノス翻訳と並行して、他のギリシア哲学者の翻訳も、それがよい相乗効果をもつ限りにおいて行なうことにした。平成22年度は、研究代表者および研究分担者によるセクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』のうちの「自然学者たちへの論駁」、および「倫理学者たちへの論駁」の完成とも重なった。また研究代表者によるアリストテレス『生成と消滅について』の翻訳は、本研究期間全体を通じて並行して遂行することになった。前者はガレノスと同時代に同様の反省的総括を行なった哲学者の著作として、後者は、ガレノスがとくにその自然学において、基本的典拠および做すべきスタンダードとみなした著作として、いずれの翻訳も大いに有益であった。

(5) これらの研究を交友のある海外の優れた研究者と連絡をとりながら行なっていくことにした。

4. 研究成果

(1) 平成22年度の研究成果

① 前半は、ガレノスと同時代のセクストス・エンペイリコスによる自然学批判、倫理学批判の検討に集中し、哲学者にして医者である点でガレノスと共通するセクストスにとって、当時のコスモポリタニズムの状況の

もと、魂の治療者としての哲学者の自覚が、「よく行為すること」から「無動揺」への幸福概念の転換と大きく関わっていることを明らかにした。

② また後半は、アリストテレス自然学の研究を通して、ガレノス自然学の基本概念について検討した。とくに構成要素、接触、混合、作用、被作用の概念が自然学においても重要性を、アリストテレス『生成と消滅について』を通して明らかにした。

③ またとくにこの年の8月2日～7日には、研究代表者は、東京で開催された国際プラトン学会(主題『国家』)に出席し、ガレノスの魂論形成に大きな影響を及ぼした『国家』の魂論に関わる諸研究に接し、ガレノスが重視する情動制御の問題について次の知見を得ることができた。(i) プラトンにも「無動揺」的な幸福概念が認められる。(ii) それを可能にする主導的な理性とは、現代のわれわれが考える reason とはかなり異なる。(iii) プラトンも含めて古代の情動制御には、現代のマインドフルネスに通じるような志向性が認められる。

④ また同プラトン学会においては、長年の親交を有するケンブリッジのバーニエツト教授、スコフィールド教授、カリフォルニア・バークレーのフェラーリ教授だけでなく、多数の優れた学者と出会い、将来の研究交流に向けてのよき基盤を築きえた。

⑤ さらにこの年の11月には、ガレノスと同時代に活躍し、彼と同様にそれまでの哲学の反省的総括を懐疑主義の立場から行なったセクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』(自然学者たちへの論駁、倫理学者たちへの論駁)を京都大学学術出版会から出すことができた。

(2) 平成23年度の研究成果

① 研究代表者は、前半は、ガレノスの自然学・生理学理論の基礎にあるギリシアの四基本要素(火、空気、水、土)とそれら相互の変化、さらにそれらからのいわゆる同質部分体(肉、骨、腱等々)の構成に関するギリシアの基本著作であるアリストテレス『生成と消滅について』の翻訳を行ないつつ、同理論に関する理解を深めた。

② また後半は、ガレノス『混和について』の翻訳を中心に研究を進めた。同書では、四構成要素の生物体における混和の問題が、医者にして哲学者・自然学者であるガレノス独自の視点から考察されている。

③ 研究分担者は、ガレノス著作『最良の医師はまた哲学者でもあること』の翻訳を完成した。この翻訳作業を通じて、ガレノスにおける医術と哲学の関係、また医の倫理の問題について基本的知見を得ることができた。

④ さらに理性と情動の関係は、医者であるガレノスにとって心身問題の一部として

重要なテーマである。研究代表者はこれについても、広くギリシア哲学全体のなかで考察を行なった。現在の心理学において筆記が感情制御にもたらす効果に注目されているが、その関連でギリシアにおけるテキストの問題、またポジティブ心理学の諸問題をも考察に取り入れ、ガレノスを広い問題連関のなかで捉えようとした。

⑤ さらにアリストテレス『生成と消滅について』の翻訳を一応仕上げ、さらなる正確さを目指して、注や解説の整備に向かった。

(3) 平成 24 年度の研究成果

① この年は、ガレノスと彼の思想的背景として、とくに自然学、倫理学に焦点を合わせた。前者についてはアリストテレスを中心に、後者についてはホメロス以来のギリシア思想の人間観、およびプラトンの幸福論、感情制御の問題を中心に研究を行なった。

② 自然学については、ガレノスの自然的著作『混和について』の翻訳を進めるとともに、そこで展開される混合概念、およびギリシア医学の基本でもある同質部分体とそれを構成する 4 基本要素の理論、さらに 4 基本要素（火、空気、水、土）の組成に関する理論を、思想的バックグラウンドでもあるアリストテレス『生成と消滅について』の内に取り押さえた。

③ また『生成と消滅について』の翻訳については、平成 23 年度に一応仕上げていたその翻訳と注をさらに精確かつ読みやすいものにして、平成 25 年度からはじまる岩波書店新版アリストテレス全集用の原稿として完成した。

④ 倫理学については、情動を魂の統轄的部分の判断の誤りとして捉えるストア派的魂＝プネウマー元論に対抗してガレノスが採用したプラトンの魂三部分説と、情動制御の問題をとくに焦点に据えた。魂三部分説は、非理性的な情動を気概の部分と欲求の部分のどちらに置くべきか、また情動の二種類は一律に同じ仕方で制御されるべきであるか、という問題を生む。この問題は、情動への対処法としてアパテイア（無情動）を目指すか、あるいはメトリオパテイア（節度ある情態・情動）を目指すかというより大きな問題とも関係し、また今日の感情心理学とも関わってくる問題である。現代の心理学者、ダマシオはソーマティック・マーカー仮説に基づいて、情動制御の不可能性を主張したが、古代の哲学者たちはその可能性を模索した。この広い連関の中でプラトンの魂論を中心に古代ギリシアの情動制御の問題を研究し、その成果を論文として表わした。

(4) 今後の展開

① 今回の研究「ガレノスによる古代ギリシア認識論・自然学・倫理学への反省的総括

の研究」を振り返ってみると、ガレノスが反省的に総括したことから、古代ギリシア認識論・自然学・倫理学について新たに見えてきたことは非常に大きく、そのヒントに基づいて、プラトン、アリストテレス、ヘレニズム哲学、また広く古代哲学・古代思想の諸局面について、新たな視点から論文、研究発表の形で種々の成果を示すことができた。

② また、とくにアリストテレス『生成と消滅について』の翻訳は、本研究によってもたらされた広い枠組みによって非常に助けられるとともに、またそれ自体、本研究におけるガレノスの自然学、とくに火、空気、水、土の 4 基本要素の考え方について貴重な示唆を与えるものであった。

③ 他方、ガレノスの哲学的著作の翻訳について言えば、①と②の研究が進展したその分、進展は遅れぎみであった。しかし平成 25 年度中には翻訳を完成し、翌年の京都大学学術出版会からの発行を目指す。

④ また総括対象ではなく、総括主体であるガレノスその人の研究については、本訳を通していくつかの知見は得られたが、それを論文や研究発表の形で発信するまでにはいたらなかった。これは今後の課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）

- ① 金山弥平、ギリシア哲学における幸福、心理学ワールド、査読有、60号、2013、17-20、http://www.psych.or.jp/publication/world_pdf/60/60-17-20.pdf
- ② 金山弥平、Recognition, Concept Formation and Knowledge: Preliminary Consideration for the Theory of Recollection in Plato's *Phaedo*, Journal of the School of Letters, 査読有、Vol. 9、2013、1-20、<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/17708>
- ③ 金山弥平、幸福とは何か？ — 古代ギリシア哲学、とくにソクラテス、プラトンの視点から —、中部哲学会年報、査読有、45号、2013、近刊
- ④ 金山弥平、探求のツールとしての映像と文字、名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」アニュアル、査読無、2012、104-107
- ⑤ 金山弥平、神の知と蠟の書き板、日本西洋古典学会、査読無、2012、<http://clsoc.jp/agora/essay/2012/120709.html>
- ⑥ 金山万里子、ソクラテスはなぜ訴えられ

- たのか？—一つの試論—、人文研究、査読無、43号、2012、54-75
- ⑦ 金山弥平、Plato on the Problem of Written Texts、Global COE Program International Conference Series (Proceedings of the 13th International Conference), De l' herméneutique philosophique à l' herméneutique du texte、査読有、2012、19-28、<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/eng/result/result01/international-conference-series-no13.html>
- ⑧ 金山弥平、プラトンと書かれたテキストの問題、Global COE Program International Conference Series (Proceedings of the 13th International Conference), De l' herméneutique philosophique à l' herméneutique du texte、査読有、2012、131-141、<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/result/result01/13.html>
- ⑨ 金山弥平、「よく行なうこと(eupragia)」から「無動揺(ataraxia)」へ—幸福(eudaimonia)と、認知的再評価、フロー、マインドフルネス—、名古屋大学哲学論集、査読有、10号、2011、1-32
- ⑩ 金山万里子、ガレノス『最良の医師はまた哲学者でもあること』、人文研究、査読無、42号、2011、63-78
- ⑪ 金山弥平、Plato as a Wayfinder: To Know Meno, the Robbery Case and the Road to Larissa、Japan Studies in Classical Antiquity (JASCA)、査読有、1号、2011、63-88
- ⑫ 金山弥平、哲学と幸福—ソクラテスの「哲学の勧め」とプラトンの高等教育、名古屋高等教育研究、査読有、11号、2011、5-22、<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/14510>
- ⑬ 金山弥平、Taxonomy of Plato's Wayfinding Enquiry、HERSETEC、査読有、Vol. 4、No. 1号、2010、1-21、<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/eng/result/result02/hersetec-vo4-no1-2010.html>
- ⑭ 金山万里子、『ピレモン書』覚え書(承前)、人文研究、査読無、41号、2010、55-71

[学会発表] (計7件)

- ① 金山弥平、幸福とは何か？—古代ギリシア哲学の視点から—、中部哲学会、2012年9月29日、名古屋大学

- ② 金山弥平、Greek Concept of Happiness and Plato's Idea on Regulation of Emotion、中希倫理學小組、中國文化大學哲學系、東吳大學哲學系、2013年3月1日、台湾、東吳大學
- ③ 金山弥平、Recollection Thesis as the Object of Recollection in Plato's *Meno*、中希倫理學小組、中國文化大學哲學系、東吳大學哲學系、2013年3月4日、台湾、中國文化大學
- ④ 金山万里子、Greek View on Human Being as Mortal Beings、中希倫理學小組、中國文化大學哲學系、東吳大學哲學系、2013年3月5日、台湾、中國文化大學
- ⑤ 金山弥平、Plato on the Problem of Written Texts、名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第13回国際研究集会『哲学的解釈学からテキスト解釈学へ』、2011年12月10日、名古屋大学
- ⑥ 金山弥平、プラトンにおけるイデア認識は、直知によるのか？、東北大学哲学・倫理学合同研究室講演会、2011年7月13日、東北大学
- ⑦ 金山弥平、ヘレニズム・コスモポリタニズムの生物学的・心理学的バックグラウンド、ギリシャ政治哲学の総括的研究2010年度研究集会、2010年12月11日、首都大学東京

[図書] (計3件)

- ① 金山弥平、岩波書店、生成と消滅について(新版アリストテレス全集、本訳)、2013、総ページ数未確定(出版確定)
- ② 金山弥平、水声社、『テキストの解釈学』(共著、松澤和宏編)、2012、57-84
- ③ 金山弥平、金山万里子、京都大学学術出版会、セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁3—自然学者たちへの論駁、倫理学者たちへの論駁—』、2010、総ページ数539頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金山 弥平 (KANAYAMA YASUHIRA)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00192542

(2) 研究分担者

金山 万里子 (KANAYAMA MARIKO)
大阪医科大学・功労教授
研究者番号：10093189

(3) 連携研究者なし